

# 三日月ジョン

みかづきじょん

# The Real Face

ノスタルジックとは何か？ こと音楽に関しては、「懐旧」「懐古」「郷愁にふけること」という直訳だけでは済まされない。そこには感情を素にした、良くできた理論があった。

取材・文/竹中 聡(本誌) 撮影/斎藤 弦



# 画が先にある音楽理論と ヴィジュアルが浮かぶ楽曲と

晩秋、フィッシャーマンズセーターにベルボトムという出で立ちの若者が、ポプラ並木を歩いている。恐らく東京都内のどこかだろう。はまったコートの襟を立てている。どちらかというときと淋しげな風景、若者は失恋したばかりだろうか。

世の中には、それがどんなものであれ画が浮かぶ楽曲というのがあつた。三日月ジョンの1stミニアルバム「みじめな僕でも恋は素晴らしい」のインプレッションをぶつけると、リーダー周藤三日月は「すい想像力です」と笑って続けた。「山口を旅行した時に、秋吉台の鍾乳洞の上のカルスト台地に立つてエンヤを聴きながら浸っていたんですよ。空も雲もすくすくと向こうまで見えて、雲の影がカルスト台地に映って見えた。あまりにも美しすぎて、そこに自分を置いてみて、僕は近くに任せていて、自転車でもこまめに来て読書をしている、という設定で。そこはかなりナルシズムな感じで、(笑)。これが文頭のインプレッションに対する、周藤による真の解答である。もちろん聴き手がそのとおりに感じるかどうかは解らないと理解した上でだが、曲づくりには、まず最初に画を考える。その中に木があれば木の事を、赤いセーターがあればセーターの事を書く、どちらかというサウンドトラックに近い、映画のエンドロールのバックに流れるような曲をイメージしているという。

曲づくりの仕方はそれぞれだろうが、立体的な音づくりをするこの4ピースのバンド、メンバーの生まれ年がほぼ70年代の後半である。少しでも当時の音楽的背景を知る者には、彼らのサウンドがその頃を背負っている事に気付くだろう。

事実、周藤は言う。「狙っている訳ではないんですけど、その頃の音楽が好きなんです。もちろんリアルタイムでは聴いてないんですけど、このロックには熱い時代があつて、70年代の欧米のロックとか、日本でもその頃のロックは熱かった。その熱い時代の音楽を聴こうとするんです。実体験がない分、余計に聴きたくなるし、めり込んでしまふ。例えば、奥田民生がフォークルセイターズをカヴァーしている。すると「それは何者だ?」となる。遊ると、やはり70年代がある。逆に言えば、気になる未知の音を調べてみると70年代の音楽に行き当たるのだ。

## 70年代を病的に掘り下げて オリジナリティは生まれる

情報時代とは言え、時代背景を持つサウンドを追ったときに、実体験に近い疑似体験を望めば、得られる情報量はさほど多くはない。周藤は続ける。「掘って探し出した当時の音楽が、良いか悪いかは聴いて判断するしかない。実際に入らないものもある。ただ、まず聴く前から異様に興味はある訳ですよ。例えば京都なら「村八分」とか。伝説しか残ってないけど、興味だけはムチャクチャあつて、聴く前から好きになっちゃつてる。(笑)。遊り、掘り下げ体質というよりオタク体質なのかもしれない(笑)。

「昨今のミュージシャンは、憧れたアーティストがいったい何を聴いて、どんな音源をルーツとするのか、それを探すべきでない。自分に影響を与えたアーティストを必要以上に追わないのである。今号のP.30「MOJO WEST Chronicle」の本文引用だが、彼らは見事に逆である。同コーナーではさらに「今、日本を蹂躪するバンドの多くはコピーバンドのプロ化である。(中略)だがコピーに毛が生えた程度の楽曲をオリジナルとしてはいけぬ」と続けた。

彼らのように、病的なまでに突きつめるからこそ、オリジナリティが生まれる事がある。いみじくも周藤が言うように、「音楽をやる上で、焼き直しになつてはダメなんですけど」と、当然奮みた上である。

## メンバーたちの京都指向 もしくはデートの蓄積

ベースの井上だいたいすけ77は「僕は日本史が好きで、京都は憧れの土地なんです。老後は京都で住むと決めてる。その時に歴史的な縁の地を回ろうと思って、今は行かずにとつてあるんです。歴史小説を読みながら、『何十年後ここへ行く』と(笑)と語り、周藤も言う。「京都はすくすく遊びに行きます。ベタなんですけど、銀閣寺が好きなんです。哲学の道から鹿ヶ谷通を散歩する。これはもう、デートで蓄積されたもので(笑)。京都って融合してるじゃないですか。お洒落文化と旧文化が、お洒落カフェの隣りに豆腐屋があつたり、お寺に行つた後にお洒落居酒屋でメシを食うとか、デートコースがつくれる。あれ?やっぱり基本がデートになつてますね(笑)」。実際になかなかの京都好きらしく、自主制作した「明日晴れるかな」というシングルジャケットは、南禅寺近くのインクラインで撮影したものだ。晶目ではなく彼らのサウンドは京都に似合う。当時は京都でのライブの実績が全くなかつたにもかかわらず、当地の大阪を抑えて京都のJEU-GIAでインディーズチャートの1位を獲得した理由を考えたとき、メンバーがいくらか京都好きだとしても、根拠としては弱い。やはりそのサウンドが京都人好みであると

考えた方が自然だろう。大学の多い京都は、他都市よりも学生運動の余波は大きかつたはずである。三日月ジョンの面々が思い描く時代である。いわゆる京都系ではない彼らのサウンドの空気感は、スッポリ京都にはまったのかもしれない。

## 論理的、知的に考える音は 伝説を成し得るだろうか

ヴォーカルの田中ジョンが「今、自分たちがジミヘンと同じ歳つて、キツイよなあ」と言つて一同を大笑いさせた。そう、伝説のミュージシャンたちが30歳を待たずに夭折した70年代後半。その頃に生まれた彼らが今、26・27歳。これからのヴィジョンについて周藤は冷静に分析する。自分たちに今あるもの、そしてないものを。

「ネオ・ノスタルジック・ロック」というのを掲げていて、今はそれでいいと思つてんですけど、ゆくゆくは絶対に枠にはまっていってしまふ可能性があるんで、音楽的には広げていきたいというのがありますね。例えば田中はレッド・ツェッペリンが好きなんですけど、今とこのその要素は出せてないし。世代的に言うとユニコーン・ジュンスカ・ブルーハーツ・アンジー、いわゆるバンドブームから入っているので、音楽には現れてませんが、影響を受けたという意味でそこへんのカラーも頭の中にはある。でもやっぱりそれよりも、僕は何しろ無類のロック好きなので、ロックの伝説になりたかつたんです。本当は今後も死んでしまふくらい(笑)。

70年代という、音楽に関する時代性を追い、突きつめること。そして音楽に対して考えること。「オタク体質」というのが、謙遜を剥ぎ取れば立派な「向学心」である。その上でどちらかという不器用で、真面目に考えるから奇をてらつたところがない。

「ノスタルジック」という言葉は諸刃である。美しい言葉でもあるが、昔にしがみついているというイメージも併せ持つ。それでも自らのサウンドを「ネオ・ノスタルジック・ロック」と言い切つてしまつたには、相当の思考を重ねたのだろう。ノスタルジックとロックの間に「偏差値」という言葉を付け加えたい。

「ジミヘン然り、ドアーズのジム・モリソン然り、今年中に伝説を残せたらいいんですけど、今死んでもただ死んだだけになるんで(笑)」と周藤は言う。そのとおりだ。理論の先に答えを見出すには、少し時間がかかる。彼らが伝説を残せるとしても、それはもう少し先の話になるだろう。そして、その可能性は、少なくともはない。

## 三日月ジョン

(ミカヅキジョン)

右頁、G.周藤三日月(すどう・みかづき/写真右端)、V.o.の田中ジョン(たなか・じょん/写真右から二番目)、B井上だいたいすけ77(いのうえ・だいたいすけ/写真左端)、Dr.美馬夕陽(みま・さんせつ/写真左から二番目)。「01年、関西大学の軽音楽サークルメンバーであったリーダー周藤と田中を中心に、井上と、後に美馬を加えて結成。翌02年、初ライブと同時に3曲入りデモ音源「三日月ジョン」を発売。京都でライブをやつたことがないにもかかわらず、昨年の自主制作した初のプレス音源シングルは京都のJEU-GIAでインディーズチャートの1位を獲得、梅田のタワーレコードの8位を上回つた。

### Information

「みじめな僕でも恋は素晴らしい」1450円(税込) Music Web RECORDS。  
6月23日に発売したタイトル曲を含む全6曲入りの1stミニアルバムが発売中。来る04年10月14日には1stフルアルバム「三日月ジョン」を発売予定。  
ライブ予定(04/8・6現在)  
■9/19(日) 神戸ブルーポート ■9/23(木) 愛知 夢希望 ■9/24(金) 渋谷 デセオ ■9/25(土) 下北沢 モザイク  
■10/1(金) 大阪 セカンドライン ■10/10(日) 神戸 バリット  
<http://www.musicweb.ne.jp/>  
<http://mikajohn.net>

